

北海道師範塾 塾頭通信

「教師の道」

第989号 平成27年8月28日

命は言葉と共に

貴方は、目が見えず、耳も聞こえないという状況を想像した事があるでしょうか。

東京大学で教授をされている福島智氏は、9歳で失明し、18歳で聴力も失っており、今は、24時間、365日、暗闇で音のない世界に身を置いています。この状況について、福島氏は、『光』と『音』を失った高校生のころ、私はいきなり自分が地球上から引きはがされ、この空間に投げ込まれたように感じた。自分1人が空間のすべてを覆いつくしてしまうような、狭くて暗く静かな『世界』。(中略)私は限定のない暗黒の真空の中で呻吟していた。」と述べています。

私には、「呻吟していた」という福島氏の苦悩の深さを自分の事として理解する事は到底出来そうにもありませんし、もしも私が彼と同じように目が見えず、耳も聞こえないという状況に置かれたとしたら、果たして尋常でいられるだろうかと考えずにはおられません。

福島氏は、「ぼくの命は 言葉とともにある」という1冊の本を上梓しています。この本の中で彼は、盲ろう者となり絶望の淵に立たされていた自分が如何にして生きる希望を見出して行ったのか、そこに至る思索の数々を綴っています。綴るというより激白しているといった方が良いかも知れません。

盲ろうという状態について福島氏は、それは単に見えない、聞こえないという状況だけでなく、自分の存在さえも見失い、認識出来なくなる状況で生きている事をも意味しており、周囲の世界が徐々に遠のいて行き、自分がこの世界から消えていってしまうように感じられると述べています。

私は幸いにも、このような絶対的な孤立感に陥った事はありませんし、仮に、そうした状況に置かれたら、寂しいとか悲しいとかという以前に恐怖を感じるのではないかと思います。

そして福島氏は、真空に浮んだ極限状態の自分を繋ぎ留め、確かに存在していると実感させてくれるのが他者の存在であり、他者とのコミュニケーションだと述べています。



それは、他者とのコミュニケーションなしには自分の存在を確かめる術がないという事であり、福島氏の言葉を借りれば、「他者に対して照射され、そこから反射して戻ってくる『コミュニケーションという光』を受け止める事によって初めて、自分の存在を実感する事が出来る」という事を意味していますが、盲ろう者にとって、他者とのコミュニケーションは簡単な事ではありません。

福島氏は、「光」が認識につながり、「音」が感情につながるとすれば、「言葉」は魂と結び付く働きをするのだと思うと述べると共に、自分を「暗黒の真空」から解放してくれたのは「言葉」であり、魂に命を吹き込んでくれたものも「言葉」だった、と述べています。

しかし、その言葉を繋ぐ手段を持たなければ、コミュニケーションはなりたちません。福島氏は、盲ろう者となって、次のような3つの壁にぶつかったと述べています。

第1の壁 コミュニケーション手段の確保

第2の壁 そのコミュニケーション手段を用いて、持続的に会話する相手をつくる事

第3の壁 周囲の「コミュニケーション状況」に私が能動的に参加できるようにする事

この第1の壁を突き崩したのは、母親のアイデアだったようです。

ある時、母親が福島氏の指を点字のタイプライターのキーに見立てて「さとしわかるか」と伝えた事で、彼は「指点字」という新しいコミュニケーションのツールを手に入れます。その後は、仲間達が「指点字」によってどんどん話しかけてくれ、これによって、彼は第2の壁もこじ開けて、閉じ込められていた地下の牢獄から解放された気持ちになったといえます。

一番難しいのは、第3の壁、即ち「開かれたコミュニケーション空間」を作る事です。

ある日、盲学校の先輩Mさんと、盲学校の同級生I君の3人でお茶を飲んでいる時、Mさんが「指点字」で福島氏に「M：I君はいつお家に帰るの？I：うーんとね、22日に帰ろうと思うんだ」と伝えたのだそうです。その瞬間、彼は、「私の内部で何かが激しくスパークした」といいます。何故なら、Mさんの「指点字」は、

- ・私に手を触れている人が、自分と別の人との会話を私に伝えた
- ・自分と相手との発言をはっきり区別し、しかも、「直接話法」で伝えた

という重要な事を福島氏に実感させる事になったからです。これは、「開かれたコミュニケーション空間」を作って行く第一歩となりました。

福島氏は、盲ろう者となって孤立した空間の中にいるように思われるかも知れませんが、決してそうではありません。

福島氏は、孤立について次のように整理しています。

「孤立」＝「コミュニケーション」－「(感覚・言語的) 文脈」

つまり、「孤立」とは「文脈のないコミュニケーション」「その場その場の刹那的なコミュニケーション」の世界で生きているという事なのであり、沢山の人々に囲まれていても、それが刹那的でただ通り過ぎて行くような関係であれば、自分の存在を実感する事は難しいと思います。

福島氏は、「盲ろう者となり、自由に言葉を交わす事が出来なくなって、コミュニケーションが水や空気や食べ物のように、生きる上で絶対に必要なものだ」と痛感した」と述べると共に、「交わりを伴ったコミュニケーションを行う事で、他者との関係性を生み出し、それによって生きている実感が持てるようになる」と指摘しています。この指摘は、目が見え、耳が聞こえる私にとっても、忘れてはならない視点だと思います。

最後に、福島氏の言葉を二つ紹介しましょう。

一つは、「人間は一人ぼっちでは生きて行けない」というものであり、いま一つは、「どのような困難な状況にあっても、可能性がゼロになるという事はない。チャレンジし、現状を変革していく可能性は必ずある」というものです。

当たり前な事をいっているようですが、福島氏の言葉には力があると感じます。

作家の北方謙三氏は、「(福島)先生の言葉は、鼓動ですよ(6月1日付読売新聞から)」と述べていますが、福島氏の言葉の力は、彼が極限の状況の中で生き抜いているからこそ生み出されているもので、それ故に力があり説得力があるのだと感じます。

(塾頭 吉田洋一)